ラストラブ

BerryLuna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストラブ

【Ｎコード】

Ｎ４４７１Ｍ

【作者名】

ＢｅｒｒｙＬｕｎａ

【あらすじ】

小島莉子は恋する十四歳の元気な子。ある日、莉子に絶望的な運命が降り掛かる。莉子の恋と運命はー

運命

私の人生なぜ狂ってるの？
その疑問が頭から離れない。そんな私の人生に光をくれたのはあなただったー

ハル「ね～莉子。部活終わったらみんなでカラオケ行くんだけど、莉子も行く？」

莉「ムリ。部活あるもん。ハルちゃん一人で行きなよ。」

ハル「えェェェ～莉子のケチ～休んじゃえよ。」

莉「ははははは」

私の毎日は平凡で普通だった。

竜「池田の言うとうり。バスケ部はお前を必要としていない。だから休め。」

莉「はァ～？ムリに決まってんじゃん。てか、あたし一応キャプテンなんですけど～。」

竜「お前の部員は別にお前を必要としてねェよ。」

莉「たっくんはほっんとウザイ。口閉じてなよ～。」

たっくん。江口竜海。中二で私と同じ部活のキャプテン。席が隣で、仲はすごく良すぎて、付き合っていると誤解されるほどだ。

付き合ってはいないけど、会ったときからたっくんに片思い中。たっくんは私の事いつもいじめるし、私のことが好きかどうかは不明。

莉「もうすぐ大事な試合があるの。たっくんとちがってものすごーく忙しいから。」

竜「オレっちも試合あんだよ。オレだけ暇みてーに言うなよ。」

莉「ふん。」

あぁぁぁぁぁ〜
またやっちゃた。
かわいくない態度をまたとっちゃた！
たっくんに女として見られたいのにぃ！
これじゃ、全然だめじゃん！
私性格超悪いじゃん！
って、そんなことより練習、練習！

莉「じゃ、みんな集まって！練習するよ！」

「「はい！」」

ダン

莉「ナイスシュート！あと少しだからがんばって！」

キュ、ドン！

莉「きゃ！」

「「大丈夫ですか先輩！？」」

莉「あっ、う、うん。ちょっと転んじゃただけだからさ。心配しないで練習に戻ろう！」

「「は、はい！」」

ズキ

「うっ。。。」

痛い。多分足をひねった。。。どうしよう。。。

竜「おいおい、どうした？調子わりぃじゃねぇか。保健室行くか？」

莉「だ、大丈夫だもん。ほらっ、うっ。。。」

竜「ほら、保健室行けよ。」

莉「いーやーだー。だれが行くかって、ひゃ！」

私の体が浮いた。たっくんに抱えられているのだ。しかもお姫様だっこ。

この状況はとても喜ばしいのだが、みんなの前じゃ、恥ずかしくて素直に喜べない。

莉「ちょ、ちょっと！恥ずかしいじゃん！おろしてよ！」

竜「ヤダ。足けがしてるくせに。」

莉「うっ。。。でも。。。恥ずかしいじゃん。。。」

全然聞いてくれない。たっくん強引すぎ～！
あぁぁぁ、恥ずかしい！
顔絶対赤くなってる！顔がもう熱い。

竜「大丈夫か？どこが痛い？」

莉「。。。ここ。」

私は素直に左足首を指差した。

竜「じゃ、ちょっと待ってろ。氷とか持って来るから。」

莉「うん。」

保健室にたっくんと私二人だけ。ちょっとドキドキする。

竜「うわ、ちょ、すげぇ赤くなってんぞ！病院行ったほうがいいんじゃね？」

莉「別にいいよ。すぐ直るだろうし。」

竜「。。。ああ。。。」

竜「おい莉子、前々から気になってたんだけどさ、お前、前より元気無くなってねぇか？なんか見てるとお前すぐ息切れしてさ、いつ

も疲れてる、ってかんじ。寝不足か？」

莉「えっ。。。」

たっくんの言う通りだ。なんかこのごろ調子が悪い。気持ちが悪いとかそいうのじゃなくて、体がだるい。力が出ない。シュートがきまらない。食欲も出ない。

莉「多分ね。でも心配しなくてよし！今日病院で検査してくるから。もしかしたら貧血だったりして。あはははは。」

竜「。。。あぁ。。。そうだな。」

今はこれぐらいしかいえない。なにかすごく嫌な予感がする。でもこんな事を言ったら、たっくんはもっと心配してしまう。今はその気持ちをかくして検査にいどむしかない。

検査を受けた。で、なんかちょっと確かめたいことがあるからって、よけいな検査をした。私の不安が増す。病気だったらどうしよう。。。

医「小島さん、これから私の言う事をすべて受け入れてください。今日検査をしたところ、あなたの症状は。。。がんです。絶対にこのがんが完治するとは保証できません。多分長くは生きられないでしょう。。。はっきり言えば二十歳前には。。。。これから抗がん剤を使った治療を行いたいと思うのですが、小島さんはそれでも大丈夫ですか？」

え？私はもうすぐ死ぬってこと？医者の言葉が信じられなくて耳に入らない。お母さんが泣いている。

私はまだこれからやりたいことといっぱいあるのに。。。こんな事を受け入れろと言われても困る。いままで元気に十四年間生きてきた私にとっては絶望的だった。

決意

がん。

私には突然の宣告だった。
今まで元気に過ごして来た私にはこの事実は重すぎた。
みんなとまだ笑って過ごしたかった。でも、それはムリなのだろうか？

ハル「おはよん、莉子～！元気ないじゃん！どうしたの？ハル様にそうだんしてみ！」

莉「おはよう。。。ごめん、後で話すよ。今はちょっと。。。」

ハル「えっ。。。あ、うん分かった。。。」

いつもの私はこうやってハルに言われると、私はふざけたことを言って、二人で笑っていた。
なのに今日の私はそんなの一切なしで、暗いもんだからハルも私が本当に落ち込んでいると理解したのだろう。

竜「莉子？お前なんかおかしいけど大丈夫か？」

莉「たっくんに心配されるほどじゃないから。気にしないで。ね？」

竜「あ、あぁぁ。」

私の普通すぎる態度にたっくんはよけい驚いたようで、その後なに

も私に言わなかった。

午前中の授業は全く頭に入らなかった。そしてあっと言う間に昼休みになった。

莉「ハル、ちょっと来て？」

ハル「いいけど、莉子まじで大丈夫？ずっと暗いじゃん。」

莉「その事を今話すから。ほら、こっち来て。」

私はハルを連れ、だれもこなそうなとこに連れて行った。
“あの”事を話すために。

莉「あのさ、今から私の言うことすべて受け入れて。そして、この事を聞いても、いままでとかわらず、そのまんまでいて。それでこの事はだれにもいわないで。お願い。」

ハル「うん。分かった。全部聞くから話してみ？」

ハルはいつもと違って冷静で、まじめな顔つきだった。とても深刻な話だと理解してくれたみたいだった。
私は順をおって説明した。このごろ体の調子が悪かったということ。病院で検査をしたという事。そして、がんで、二十歳までは生きられないと言うことを。。。
ハルは最初は固まった。口をぽか～んと開け、目を丸くし、ショックな顔をしていた。
事実を受け入れたのか、今度は悲しそうな表情になり、ぼろぼろと

泣き始めた。

ハル「っ莉子、ひっく、私もね、っひ、莉子を助けられる方法、探すから。っ私、莉子といつでも一緒だからねっ。ひっく。。。」

莉「ハル。。。ありがとう。私、がんばって病気と戦うから。。。」

うれしかった。少し希望が見えた気がした。
でも本当はたっくんにも伝えたかった。
たっくんは私の初恋の相手だった。だから最後に、私の気持ちを伝えたかった。キモイと思われてもいい。悔いをのこさず死にたい。

放課後になり、校庭は夕焼けでオレンジに染まっていた。風が私の顔をそっとなでた。長い髪ははらはらとなびき、私は夏の空を見上げた。
その時、私は決意した。
たっくんに私の気持ちを伝えると。

決意（後書き）

いや～
初めての小説だからひどいな～表現が。。。
読んでくださった方々にもうしわけない。。。m（＿＿）m
初めてなので、お許しください。もっとがんばれねば！

思い

たっくんは私の本当の気持ちを聞いてどう思うだろうか？
やはり伝えなべき？

先生「じゃ、皆さんさようなら！」

「「さようなら！」」

はぁ、やっと終わった。
一日がすごく長く感じた。
そして、隣で帰る準備をしているたっくんにこそっと伝えた。

莉「ねぇたっくん、ちょっと放課後いい？」

竜「え、別にオレはいいけど。」

莉「じゃ屋上で先に待ってるね。ぜったい一人できてよ？」

竜「あぁ、うん。」

たたたた
急ぎ足で階段を上った。
本当はもっとゆっくり行ってもいいのだが、緊張して急いでしまう。

莉「はぁ、はぁ。後はたっくんを待って伝えるだけだよね。」

竜「何を？」

莉「え？」

ばっと後ろを向いた。たっくんがもうすでに屋上に居た。

莉「な、なんでもう居るの！？」

竜「はぁ？なんでって、屋上への近道の階段があんじゃん。普通に上るの面倒だから近道で来たんだよ。そんな事もしらねぇの？」

うっ。。。忘れてた。。。近道があったんだ！

私のバカ！

竜「で、伝えたい事って？」

莉「あっ、え、えっと。。。」

竜「早く言えよ。イライラするだろうが。」

莉「うっ。。。」

さっきの根性がどこかへ消えた。

伝える勇気が無い。

竜「ほら。早くしろよ。」

莉「分かったよ、うるさいな！わ、私は初めて会った時からずっとたっくんの事が好きだったの！」

ゆ、言っちゃた。

たっくんは固まって、何にも言わなかった。

やっと口を開いたと思ったら、

竜「なんだよイキナリ告ってさ。なんか変なもん食べた？」

はぁ！？勇気だして告白して返事はこれ？キモイって言われたほうが正直よかった！

竜「なぁ～お前ちょっとおかしいんじゃねぇの？お前本当に莉子？」

莉「。。。」

竜「病院へ連れてってやろうか？そしたらー」

莉「うるさい！私が正直な気持ちを伝えてなにが悪いのよ！？私はもう長くは生きられないのよ！」

竜「え？」

口を手でばっと隠した。

もう、前が見えないぐらい涙が目に溜まっていた。

ヤバイ。言っちゃった。たっくんだけには言いたく無かった。

でも、もう隠しとうせない。

竜「おい。長く生きられないってどういう事？お前がもうすぐ死ぬみてぇじゃねぇか。おいー」

莉「そうよ。死ぬのよ。私は“がん”だっ、て医者に言われた。二十歳までには生きられないんだって。だから悔いを残さないように

今こうして、告白したのにー」

ぎゅ。。。

莉「きゃ！」

もう私は泣き崩れるところだった。
でも、突然たっくんが私を抱きしめた。
抱きしめたと思ったら、突然思いもよらぬ発言をした。

竜「っんだよ。。。お前が苦しんでた事をもっと早くオレに言えよ！」

莉「なんですぐたっくんに言わなきゃなんないのー！？」

たっくんのきれいな顔が私の目の前にいる。
そして私の唇のなんか柔らかいものが触れている。
すぐに分かった。
私はたっくんにキスをされていると言う事を。

莉「っん。。。」

はっ、と我に帰った。
今、自分は突然キスをされているという事を。
顔を真っ赤にして、たっくんを思いっきり突き飛ばした。

莉「と、突然なにすんの！？」

竜「オレは、莉子が好きだ。」

莉「えっ。。。」

竜「オレは莉子に告白されてすごくうれしかった。でも、あまりにも突然だからびっくりして、莉子を傷つけた。その後、がんだとか、もうすぐ死ぬとか言われて、ショックだった。。。」

私の体を抱きしめるたっくんの強い腕に力が入る。

莉「い、痛いよたっくん。。。」

竜「あっ、ゴメン。。。」

ぱっと私の体を離したたっくんは顔を真っ赤にしていた。

うれしかった。

たっくんが私の事を好きだっと言ってくれた。

キスをされた。

莉「ねぇ、たっくん。本当に私でいいの？」

竜「あたり前だろ？お前と一緒に病気と戦うから。ずっと一緒にいよう。」

莉「うん！」

私は泣きながら、たっくんとまた甘い、甘いキスをした。

私たちはやっと結ばれた。ずっと一緒にいようと誓った。

ずっと一緒にはいられないと分かっていながらー

思い（後書き）

今日は疲れのせいか、眠いのが悪いのか、小説の出来が超悪い。（≧ロ≦）
しかも長い！？（。A。；）
まだまだアマチュアだから、もっといい小説が書けるようにがんばろう！（「□」；）

絶望

ずっと一緒にいようー

彼の言葉が頭から離れない。
夢のようだった。
たっくんと一緒になれた。それだけがうれしくて。。。

二日後、私は病院に入院した。
そして苦しい治療が始まるー

莉「うっ、あっ、うっぐ！」

看「小島さん大丈夫ですか？」

莉「っはい。。。うぁ、がっ、ふう、あっ、ぐっ！」

私は抗がん剤で治療をしている。
でも抗がん剤はすごくつらかった。

食欲は減り、毎日のように吐き体重は前より１０ｋｇぐらい落ちて、
私の自慢だった長い髪は抜け落ちていくー
私は疲れにより歩けなくなり、寝たっきりか車いす。

でも、たっくんやハルがお見舞いに来てくれると、笑顔になれる。
私を乗っけた車いすを押して、昔とかわらず笑って話せると、病気の事を忘れることが出来た。

竜「なぁ莉子。」

莉「なぁに？」

竜「オレ、バスケのボールあるけど久しぶりにやる？」

莉「えっ、いいの？」

竜「あぁ、わざわざお前のために持ってきたしな。」

たっくんは笑顔で言った。

たっくんのその小さなやさしさがすごくうれしかった。

２人で外にでてバスケを始めた

竜「ほら、じゃオレに投げてみ。キャッチしてやるから。」

莉「うん。」

私はボールをギュっと持ち、思いっきりなげた。

どん

ボールはまったく飛ばず、私の目の前で落ちた。

私はボールを投げるのが得意だった。

けど、今はだだ私の目の前で落ち、たっくんのほうにはまったく届かなかった。

目の前が暗くなった。

今までずっとやって来たバスケがもうできない。

とても苦しい現実だった。

竜「莉子。。。」

たっくんは悲しい顔でぽつりと言った。

莉「ううん。いいよ。もう私はバスケが出来ないって言うことなんだから。これが現実なんだよ。」

私はもう泣きそうだった。
大好きだったバスケ。
みんながいてくれたからできた。
なのにー

莉「ねぇ、今日はもうゆっくりしたい。今日はもう一人にさせて。ごめんねたっくん。」

竜「いいよ。今日はゆっくりしな。部屋まで一緒に行くよ。」

莉「ありがとう。」

たっくんが帰った後、私はずっと泣いた。
いつか私の大事な物はなくなる。
恋も友情も家族も、すべてー

一週間ずっとたっくんはこなかった。ハルは今部活の仕事でこれないし、私は病室で一人。
髪もすっかり抜け落ち無くなり、バンダナをつけるようになった。

たっくん。。。
たっくんに会いたい。

でもこんな姿をたっくんに見せられない。。。
髪が無いこんなひどい姿の私を。
もし私が病気ではなかったら、っといつも考えてしまう。
その病気では無い夢の自分は笑顔でたっくんと一緒にいる。
現実は笑っている余裕も無かった。

ガラガラ

私の病室のドアが開いた。
だるい体を動かしドアを見ると、そこにはたっくんがいた。

莉「たっくん。。。」

竜「。。。莉子。。。」

私を見たたっくんは少しショックな顔をした。
でもそれは当たり前だろう。
だって私の髪の毛は無くなってて、顔には色は無く、明らかに健康で大丈夫な姿じゃなっかたからだ。

莉「。。。気持ち悪いでしょ？こんな私。別れたいでしょ？」

竜「全然。莉子は莉子だし。どういう姿だろうとオレはお前の事がー」

莉「なんでそんなに優しくしてくれるの？」
私は少し声を大きくして言った。

竜「それはオレがお前の事を愛ー」

莉「私はもう昔の自分には戻れないんだよ！？ボールもなげられない。。。私がたっくんの横にいても面倒なだけで、私よりましな女の子がいー」

バッ

たっくんに抱きしめられた。
腕に力がすごく入ってて、少し痛かった。

莉「い、痛いよたっくん。。。」

竜「お前本気でそんなこと思ってんのか？オレはずっとお前だけを愛す。言っただろう？ずっと一緒にいようってー」

そのままたっくんは私をずっと抱きしめ、泣いていたようだった。

莉「たっくん。。。」

私の呼びかけでたっくんの顔が私のほうを向いた。
そしていつの間にか顔が近ずき、私の唇がたっくんのと触れた。熱くて、溶けるぐらい甘くて。
夢中にキスした。
たっくんの前髪が私の頬に触れてくすぐったい。

莉「たっー」
唇が離れたと同時にたっくんの名前を言おうと思ったら止められて、

竜「これからはたっくんじゃなくて竜海って呼べ。」

莉「えっ。。。」

私は驚いた顔をしてたっくんを見ると、たっくんは顔がすごく赤くなってて、愛しく思えた。

莉「竜。。。海。。。」

顔を赤かくし彼の名前を言う。

竜「そう。竜海。」

とびっきりの笑顔で私にささやいた竜海。

うれしかった。

時が止まってほしかった。でもこのような幸せは永遠では無いと後で知ることになるー

絶望（後書き）

何かと忙しくて更新が出来ない。。。？（ ？ ; ）
てか、私の小説ひどい。ひどすぎる！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4471m/

ラストラブ

2010年10月18日09時22分発行